

1 生が体育を1年間は履修する時期が長く続いたが、ある時期からは半期のみとなり非常勤
2 講師の削減など体育授業の運営が困難を極めた。新学部設置にともない上司教員が移籍し
3 たり転業したりする中、当時の若手教員で結成した大学体育授業研究プロジェクトチーム
4 の活動が学内外で広く認められた。その結果、体育選択化から20年を経て、2014年に1
5 年次前後期を通じた体育必修に回帰することができた。2年次以降は従来どおり選択科目
6 として継続して開講されている。これら一連の活動報告を、日本大学スポーツ科学部での
7 招待講演で行い、その内容を桜門体育学研究に掲載している（木内，2020b）。現・大阪工
8 業大学・中村友浩教授，現・法政大学・荒井弘和教授との中村N・荒井A・木内Qによる授
9 業研究打合せ（NAQミーティング）を行った時期（2003-2006）は、今の私の原点ともいえ
10 る貴重な4年間であり、大きな転機であった。

11 6-2【研究】自身の博士号取得と、指導学生の博士号取得

12 その荒井先生の専門とされるスポーツ心理学・健康心理学関係の繋がりを知り合った
13 方々の中でも、橋本公雄先生（当時、九州大学教授）との出会いは私の人生の転機となっ
14 た。大阪工大で中村先生と荒井先生と3人で大学体育授業研究に精力を傾けるもっと昔か
15 ら、大学体育授業を対象に体育心理学の観点から研究を続けてこられたのが橋本先生であ
16 る。九州地区は今もなお大学体育授業研究が盛んな風土があり、それを作り上げたのも橋
17 本先生である。そんな橋本先生のご指導のもと、大工大での教育実践研究を軸に博士論文
18 を仕上げ、博士（教育学）を取得できたことは、私の生涯の中でも筆頭の成果といえる。
19 私よりも20歳ほど年上の橋本先生は今もなお研究活動や社会貢献活動を継続されており、
20 活力ある生活を送られている。橋本先生、中村先生、荒井先生は、私の生涯の師である。

21 筑波大学へ異動後は私自身が博士課程の大学院生の研究指導を行える立場となった。こ
22 れまで6名が博士（体育スポーツ学）の学位を取得したことも、私自身の学位取得と並ん
23 で専門的な成果といえる。次世代の大学体育スポーツを担う人材を自分の手で育てること
24 ができることは、何よりの喜びであり、生き甲斐である。前任校ではもっぱら共通科目体
25 育の授業担当のみであった私が、卒論、修論、博論の指導ができるようになったことは、
26 学位を取得する前の私には想像がつかなかった。2つ目の大きな転機であった。

27 6-3【サービス】論文誌「大学体育スポーツ学研究」の活性化

28 大体連発行の論文誌「大学体育学(2004-2018)」の編集委員を2011年から拝命し、2015
29 ~2019の5年間、編集委員長を務めた。委員長就任後、最初に取りかかったのは、査読シ
30 ステムの改善であった。掲載論文の質を底上げするためには、豊富な研究実績を持つ、実

1 践研究に理解ある研究者による査読と、投稿者との丁寧なやりとりだと考えたからであつた。2019年には日本学術会議協力学術研究団体の指定を受けたことで、大体連は名実ともに学術団体としても認められた公益社団法人となった。これにより、各大学の学位論文審査や教員としての承認審査の業績に、「大学体育学」を掲載できるようになり、フォーラムへの出張旅費支給も各大学で認められることになった。さらにそのタイミングに合わせて、論文誌を「大学体育スポーツ学研究」へ、フォーラムを「大学体育スポーツ研究フォーラム」へ名称変更した。これには、大学体育授業だけでなく、近年注目の高まる大学スポーツに関する実践研究を求める意思を示す意味も含んでいた。

9 「大学スポーツ学研究 17号」を2020年3月に発行したのち、それまで副委員長としてサポートいただいていた近畿大学の西田順一先生に、編集委員長をバトンタッチした。今回、APワークショップと同時進行のTPワークショップへ参加されている難波先生と、帝京平成大学の園部豊先生に副委員長をお願いしている。私は編集委員長と副委員長を支える立場の編集幹事として、現在も本誌編集に携わっている。西田先生は委員長着任後、担当編集委員制の導入、特集「新型コロナウイルスに挑む大学体育」の企画、優秀論文賞の選考経過と講評の巻末掲載、フォーラムでの優秀論文賞の受賞講演企画、論文ページデザインの刷新、そしてオンラインジャーナルの印刷冊子体のオンライン販売など、新しい発想のもと、高い行動力とリーダーシップで、本誌の水準と活性度を高めてくれている。

18 今の私にとって、この「大学体育スポーツ学研究」の編集に携わることが、教育—研究—社会貢献を目に見える形で繋ぐ手段であり、統合の成果ともいえる。また、編集幹事グループのメンバーは研究仲間であり、同志であり、相互に信頼できる繋がりを維持できていることは、何よりも大きな励みとなっている。

22

23

7. 大学教員としての目標

24 7-1 大学体育教員へのTPおよびAPの普及

25 大学体育の領域で以前から課題として挙げられているのが、「優れた実践に関する情報集積」である(木内, 2021a; 2023)。優れた指導実践を名人芸として風化させるのではなく、TPやAPを書き残すこと、そしてそれを公開すること、継続することで、教育や指導の質が改善されていくと思われる。大学体育や大学スポーツの領域へTPやAPを普及させていくことが、上記の「大学体育スポーツ学の体系化」へ繋がると考えている。学問としての教育学の体系化を推進する教育哲学者・苫野一徳氏(2017, 2022)の言葉を借りて大学

1 体育にあてはめると、次のようになる。「よい大学体育とは何か、それはどうあればよい
2 といいうるかという哲学的な探究を土台に、そのような大学体育はいかに可能かを実証的、
3 また実践的に探求していくこと」が望まれる。その蓄積（大学体育の教育学としての体系
4 化）が大学体育の必修/選択の別や開講年次/年数に反映されると信じて継続していくこと
5 が、大学体育に関わる教員の責務だと思われる（木内，2023）。そのための土台づくりは、
6 TP/APの普及にかかっている。2020年以降、TP関連の報告を筑波大学体育センター紀要
7 「大学体育研究」へ掲載している。大学体育スポーツ高度化共同専攻の必修科目「大学体
8 育論」において、TPチャートとティーチング・ステートメントをセットにした簡易版TPの
9 作成を、授業の到達点として設定した。その原稿を、「大学体育研究」で報告掲載しても
10 らうことにしている。

11 7-2 大学体育スポーツ学の体系化の課題で科研費獲得

12 再び苦野（2017, 2022）の言葉を借りて大学体育にあてはめると、「大学体育の哲学と実
13 証と実践」、あるいは「大学体育の論と証拠と満足度（木内，2018；2020b）」が、絶えず
14 相互に関連し支え合う必要がある。これら一連の流れを、「大学体育スポーツ学の体系化」
15 と表現することができる。どのような体育授業や運動部活動がよいと考えられるのか、大
16 学で体育授業が開講されたり運動部活動が盛んに行われることをどのように意味づけるの
17 か、といった「哲学的」研究を、TPやAPを大学体育教員や部活動指導者へ執筆してもら
18 うことで広めていきたい。このことは、大学体育や大学スポーツに関わる教員や指導者の
19 職業的IDの発達にも寄与し得る。TPだけでなくAPに取り組むことで、教育—研究—サー
20 ビスの統合をはかり、自身の生き方に自覚的になれると考えられるからである。

21 「実証的」研究は、「大学体育スポーツ学研究」を軸としながら、「体育学研究」など
22 も含めて、大学体育および大学スポーツの実践研究を通して得られた成果を、総説として
23 しっかりまとめるべき時期に来ているように思う。大学体育が国内で広く実施されている
24 東アジア諸国（中国、韓国、台湾）ですら大学体育スポーツに関する「大学体育スポーツ
25 学研究」のような専門誌は存在せず、他国について調べても同様であった。

26 「実践的」研究も、疎かにできない。学術誌ではどうしてもプログラムの効果検証を軸
27 とした内容になりがちである。そこで、体育授業や運動部活動の内容そのものを詳細に示
28 したプログラム集のような情報が必要と思われる。学術誌の原著ではない資料や報告とし
29 て、あるいは紀要へ、大学体育授業や大学スポーツの実践内容、指導内容そのものを記録
30 した情報の開示が望まれる。

1 以上のように、大学体育スポーツ学の体系化の課題で科研費を獲得し、研究を推進して
2 いきたい。

3 7-3 大学体育スポーツ学の書籍出版

4 前項で述べた大学体育スポーツ学の体系化を課題に科学研究を進め、その成果を書籍と
5 して出版することをめざす。苫野（2017, 2022）の理論を援用し、「哲学編」、「実証編」、「実
6 践編」からなる三部構成とする。「哲学編」には、大学体育教員による TP や AP を、大学ス
7 ポーツ指導者にはコーチング・ポートフォリオ(CP)を掲載してもらうことを想定している。
8 東京都市大学が教員に推奨しているティーチング・ステートメント（東京都市大学 FD 推進
9 センター、2020）に加えて TP チャートも添えて、多くの教員/指導者の理念を閲覧できる
10 ものにしたい。「実証編」には、大学体育スポーツ学研究を軸とした総説論文を、「大学体
11 育スポーツ学研究」の編集幹事グループのメンバーで協働して取りまとめたい。「実践編」
12 では、シラバスだけでは語れない、体育授業の教場設定（グラウンド・レイアウト）のイ
13 ラストなども取り入れ、各教員が何を考えて体育授業を運営しているのかが具体的にイメ
14 ージできるようなプログラム集をめざしている。

15

16

おわりに

17 大学教員の中でも体育教員は、自身が学生時代から継続してきた運動部活動の指導に関
18 わる場合が多く、その位置づけが教育、研究、サービス（管理運営・社会貢献）のいずれ
19 に該当するかは、個人で異なる。著者は野球部の部長であり現場で指導を直接行う立場に
20 はないが、監督やコーチとして大学スポーツの現場で直接指導を日々行う大学体育教員に
21 にとって、AP 作成はより大きな意味を持つ。自身の教育—研究—サービスに共通したコア
22 の部分（教育理念、コーチング理念）を探り、それに自覚的なることは、コーチングの質
23 をより高めることに寄与するに違いない。また、教育—研究—サービスといった大学教員
24 としての活動バランスをを整える上でも、全国の大学体育教員のみなさんに AP 執筆を推
25 奨する。

26

27 付記

28 第 24 回大阪公立大学高専アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ（2024 年
29 9 月 10 日～12 日）において、北野健一先生をはじめとする大阪公立大高専ティーチン
30 グ・ポートフォリオ研究会の先生方、スーパーバイザーの竹元仁美先生（令和健康科学

1 大), そして私のメンターを務めてくださった金田忠裕先生(大阪公立大高専)より、細
2 やかな温かいサポートをいただきました。心よりお礼申し上げますとともに、感謝の意を込
3 めて、修了証を掲載させていただきます(資料12)。

4 (資料12 修了証)

5

6 文献リスト

- 7 相川充, 高本真寛, 杉森伸吉, 古谷真, 個人のチームワーク能力を測定する尺度の開発と
8 妥当性の検討. 社会心理学研究, 27, 139-150, 2012.
- 9 木内敦詞, 大学体育授業の振り返りと改善のための実践: 論と証拠と満足度を支えるリフ
10 レクション. 大学体育, 45(1), 55-58, 2018.
- 11 木内敦詞, ライフスキル獲得に関連する授業内の経験を振り返る大学体育ソフトボール授
12 業: 自己開示, 他者協力, 挑戦達成, 楽しさ実感に着目して. 大学体育研究, 42, 3-14,
13 2020a.
- 14 木内敦詞, 大学体育の論と証拠と満足度を整える. 桜門体育学研究, 55, 103-106, 2020b.
- 15 木内敦詞, 学生対象の調査データを活用した SoTL のススメ. 体育の科学, 71(6), 398-402,
16 2021a.
- 17 木内敦詞, ティーチング・ポートフォリオ・チャートの大学体育への適用: 教職歴30年の
18 大学教員の事例報告. 大学体育研究, 43, 137-144, 2021b.
- 19 木内敦詞, 大学の実技科目から考える低頻度の運動の役割: コロナ禍から学ぶ大学体育の
20 価値. 体育の科学, 73(8), 510-515, 2023.
- 21 木内敦詞, 誰もが全力で接戦を楽しむ大学体育ソフトボール授業の教育実践記録. 大学体
22 育研究, 46, 1-16, 2024.
- 23 栗田佳代子, <https://kayokokurita.info> (参照日 2024年12月5日)
- 24 松下佳代, FDネットワーク形成の理念と方法—相互FDとSOTL. 京都大学高等教育研究セ
25 ンター編「大学体育のネットワークを創る—FDの明日へ—」, 東信堂. pp.44-67, 2011.
- 26 三輪建二, わかりやすい省察的实践: 実践・学び・研究をつなぐために. 医学書院, 2023.
- 27 旺文社, 私たちのカラダは運動によってどう変わるのか. 特集・大学びっくり研究. 運動
28 生理学のスミぐあい. 旺文社受験情報誌 WING, 1984.
- 29 大山真紀子, 根岸千悠, 佐藤浩章, SoTLに基づいた教育実践研究計画を作成するプレFDプ
30 ログラムの試行と評価. 日本教育工学会論文誌, 41(suppl), 225-228, 2017.

- 1 東京都市大学 FD 推進センター, ティーチング・ポートフォリオ成果報告書, 2020.
- 2 [https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-](https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.pdf)
- 3 [605c90e90d057.pdf](https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/03/20210325-605c90e90d057.pdf) (参照日 2024 年 12 月 5 日)
- 4 苫野一徳, 教育学のメタ理論体系. 本質学研究, 4, 1-17, 2017.
- 5 苫野一徳, 学問としての教育学. 日本評論社, 2022.

